

審査の結果の要旨

氏名 平澤 歩

本論文は、先秦期に発した五行説が前漢末期に性格を激変し、その後、複雑さを増して行く過程について、経学理論に分析対象を絞って詳細に論じたものである。全体の構成は序論および本論5章、結論からなっている。

第一章・第二章では、先秦・前漢期の五行説に関する様々な要素について、雑多に存在し相互に矛盾する先行研究を批判的に継承し整理することによって、五行説はもともと統一された単一の理論ではなく、時令・占術など別個に発達した複数の理論であることを明らかにした。本論考の基礎部分である。

第三章・第四章では、五行説・経学の画期となる、劉向・劉歆の学説について詳しく論じた。劉向が複数の経典を互いに参照し、五行・経説を横断的に論じたこと、および劉歆がその方向性を更に進め、精密にして壮大なる学説体系を構築したことを、現存する資料を綿密に検証することによって復元した。本論考の中心部分とすることができる。

第五章では、劉向・劉歆以後、後漢の経学者はその精神を受け継ぎながら、より多くの材料を用いて五行を論じ、その結果、五行議論が複雑化したことを論じた。五行思想の多彩な展開過程を活写し、論理の多様さを明示するところに本章の狙いがある。

周知のごとく、五行研究は比較的長い歴史をもつ中国学の研究分野の一つである。だが初期の五行説が素朴で単純であったことは、先行研究で幾度も述べられて来たとおりであろうが、それがいつどのように複雑化したのかについては、詳細な考証はほとんど行われていない。また経学が前漢・後漢の際に変容したことについても、古くから指摘されて来たが、経学全般について論じようとするれば、広範囲にわたり煩瑣な問題を論ぜざるを得ない。

本論文で第一に評価すべきは、上記問題意識のもと、経学に分析対象を絞り、成立年代を比較的に確定しやすい資料を中心に分析考察することによって、難解な五行学説の変遷を堅実に論じたことである。劉向論（第三章）や修母致子説の分析（第五章）などは特筆に値する成果にあげることができるであろう。第二に評価すべきは、五行という切り口によって、経学の質的な変化を、従来よりも分かりやすく示すことに成功したことである。経学史のアポリアの一つ、劉向・劉歆ごろにおける経学の質的転換（並立から統合へ）を、反論の余地のない明確な証拠を多数あげながら丁寧に説明しており、高く評価することができる。五行思想や経学の歴史を論じる場合、後の研究者は本論文を研究の基礎としなければならないであろう。

本論文には天文学医学と五行思想の関係分析など、今後に残された課題もあるが、従来の五行研究のレベルを大きく超えてきている。論者には特に五行思想史の全面的な解明を期待したい。

審査委員会は以上にもとづいて、本論文が博士（文学）の学位に値すると判断する。